
着信拒否

三嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

着信拒否

【Nコード】

N9311Q

【作者名】

三嶋文絵

【あらすじ】

妹が事故に遭った。父の愛人とその娘たちが暮らすエリアで。弟は妹の容態よりも、この先起こるであろうごたごたを気にした。少年が覚えた違和感の、それは一つ目だった。 外部サイト「みくり」掲載作品です。

（前書き）

「voice」からの連作の3本目です。単独でも読めるように努めたつもりですが、併せてお読みいただけると嬉しいです。

メニュー。メモリ。アドレス帳。タイトルなしの九番フォルダ。
一番下の名前なしナンバー。コール。発信。

繋がらない。切断。リダイヤル。繋がらない。切断。もう一度リダイヤル。繋がらない。切断。……もう一度。

繋がるはずはない。上の妹と俺がモバイルのナンバーを交換したのは、互いに着信拒否にしておくためだ。上の妹だけでも俺だけでもない。下から二番目の名前なしは姉のナンバーだし、兄たちや弟も同じことをしているはずだ。

着信拒否といっても着信記録は残る。通話拒否と称するべきだ。声も聞きたくない相手だから、新年の挨拶や進学祝いの代わりに、着信記録を一つ残す。好悪の問題であって礼儀の問題でないことを示すために。おめでとうなんてあいづらに言ったり言われたりしたらめでたさが褪せる。

リダイヤル。切断。リダイヤル。切断。繰り返す。何度でも。何度でも。

帰ったら弟がテーブルに突っ伏していて何かと思った。泣いているようにも見えたけれど、大儀そうに上げた顔は寧ろ、疲れたような感じだった。

「何だよ」

「……コール来てるから。自分で聴いて」

いつになく投げやりな口調に内心首を傾げつつ、通話記録を再生して、俺は下の妹の明日香が事故に遭ったことを知った。

聴き終えて振り返ると、弟は両耳を塞いでいた。この距離で再生すれば聞こえて当たり前だ。刺激しないようにそつと自室へ上がる。それはそれで刺激する結果になったかもしれないが。連絡があったときに家にいたのは弟一人で、父にも母にも兄たちにも弟が伝えた

ことは後で知った。こんな話を三回も四回も繰り返せばそりゃあ気も滅入るだろう。

明日香は腹違いの妹になるが、そういう実感はあまりない。今の母が継母だという実感からしてない。実の母は早くに死んだ。俺は抵抗なく継母を母と呼び、明日香を妹と思ってきた。事故の知らせは普通にシヨックだったし、明日香の容態は普通に心配だった。

「……行くの？ 病院」

改めて外出の用意をして下りていくと、弟が呟くように訊いてきた。

「行くけど」

「待ってて。僕も」

口にした内容と裏腹に気の乗らない様子で、弟は席を立った。

「事故があつたのが第五区なんだよ」

「って言ってたな」

「あの人たちがいるところでしょ」

「……あ」

第五区。そうだ、気づかなかった。あのエリアには父の愛人が住んでいる。腹違いの姉妹になる娘も二人いる。あの二人は明日香と違って、腹違いという実感が大いにある。

第一次か第二次かの大区画整理以来、『区』というのは『その中で日常生活が成り立つ最小単位』だ。食べ物屋から着る物屋から、ステーションからスクールから派出所から娯楽施設から、結婚式場から病院から葬儀所から墓場から、一通りは揃っている。スクールのレベルや娯楽施設のタイプの違いはあるけれど、普通に生活する上では、別の区へ行く必要は基本的にない。建前上というか、選り好みを全くしないのならの話ではあるが。

だから、スクールや勤め先があるわけでも住んでいるわけでもない区に、たまたまいたなんてことはまずありえないのだ。用があるからそこにいる。意識して行ったに決まっている。隣りならまだし

も隣りの隣りの区となればなおさら。

「兄さんがさ。『なんで第五区なんだ』って」

「言いそうだな」

「真っ先にそこなんだから」

弟は溜め息を吐いた。

「明日香のことだから、第五区に友達がいてもよさそうな気がするけど。あの人たちに用があつたんだとして」

「怒り狂うな、兄さん」

「向こうも受けて立つだろうしね。母さんと小母さんも揉めるかもしれないよ」

道中、弟は憂鬱げに、俺は戸惑い気味にそんなことを話した。明日香と仲のいい弟が、明日香本人には触れないで、周辺ばかり気にするようなのが不思議だった。

勿論、弟も最初は普通にショックを受けて、普通に明日香を案じたんだろう。それを抑えて父と母と兄たちとに連絡を入れたら、上の兄は容態より先に事故現場を問題にしたわけだ。二度目のショックを受けると同時に、この先の展開が読めてしまったのだと思う。

と、いったことを考えたのは後からだ。困惑したまま病院に到着し、治療室の前の長椅子に両親をみつけて、やっとそれどころではなくなった。

父は腕を組み、母は膝の上で拳を握っていて、扉の向こうに叱咤の念を送っているかのようにだった。何となく近づきにくくて、かなり手前で立ち止まる。そのまま気づかれずにいるうちに、治療中のランプが消えた。

母は弾かれたように立ち上がると、出てきたドクターに詰め寄るようにして首尾を問うた。父は母よりは冷静な様子で、それでも焦燥は遠目にもわかった。俺と弟も急いで近寄る。父の視線が一瞬だけ向いて、すぐドクターに戻った。

一応死なずには済んだらしいが、まだ危険は脱していないという。目立った外傷はないものの、頭を強く打ったのだ。意識がいつ戻る

のか、そもそも戻るのかどうかもわからない、という意味のことをドクターは告げた。

母が治療室に駆け込み、父が後を追った。ドアのところから恐る恐る覗くと、跪く二人の頭越しに、ベッドの上の明日香が見えた。

「明日香……！」

「明日香、明日香！」

俺と弟はどちらからともなく、顔を見合わせ、踵を返した。静かに早足に廊下の端まで行った。

「……わかってなかった」

周りに人影がないのを確かめてから、弟が呟いた。顔が青い。俺もそうだろう。

明日香は——死ぬかもしれないのだ。

授業どころじゃないからスクールを休んで、落ち着かないからスポーツセンターに出かけて、コートとラケットとボールを借りた。振り替えやら試験休暇やら創立記念日やら、カレンダー外の休みなんてスクールごとにバラバラだ。学生に違いがない年齢のやつが昼間から出歩いていても、別に怪しい顔はされない。何かじつとしていられなかったし、何かを力一杯に叩きつけたかった。

明日香はやはり、姉たちに会いに行ったのだった。明日香にとっての下姉は、俺には上の妹になる。その上の妹によれば、学校帰りに明日香が待ち受けていたので、姉と三人でしばらく話したのだという。事故が起こったのはその後、ステーションまで送っていく途中のことだ。

「——畜生」

十何度目かの空振りをして、俺は舌打ちして悪態をついた。さっきからこんなのはつかだ。ラケットには当たってもスイートスポットを外して変な方向へ飛んだりとか。

進学と同時に家を出ている高等課程生の兄たちも、事故の翌日には長距離トレインで駆けつけてきた。長距離トレイン、高速トレイ

ン、弾丸列車、ブレット。その名と呼び名の通り、弾丸のような高速で長距離を走る列車。そんなに早く帰ってくるとは正直思ってた。……明日香を、本気で心配するとも。

実の母を覚えているせい、特に上の兄は明日香をあまり好いていない。が、一緒に病室を訪れたときは、にも拘らず啞然とした様子だった。妹は妹だし、一緒に暮らしてきたわけだし、と誤魔化すように言い足していきながら、明日香に注いでいたまなざし——普段からは、あの兄からは、想像もつかないような。変わり果てた姿に心が揺らいだのだとすれば、哀しいながら喜ばしいことであつてもよさそうなのだけだ。

何か、おかしい。変だ。一時とはいえ、弟が明日香よりも周辺を気にしたこととか。無理もないとはいえ、母があも取り乱したところとか。父があまりにも無力に見えたこととか。俺が何球も打ち損ねたこととか。——生気のない明日香とか。

なんでこうなったんだ。なんで違う風にはならなかったんだ。こうはならない可能性だって、あの日が始まった頃にはたくさんあったんだろうに。

「——ったくっ！」

狙いと違う壁にぶつかって跳ね返り、荷物置き場へ転がっていくボールを追いかけて捕まえたところで、見計らったかのようにモバイルがけたたましく鳴った。尤もけたたましい音量に設定したのは俺なわけだが。弟からであるのは、表示を見なくてもメモディでわかる。

「明日香の様子、見に行くんだけど。一緒に行く？」

「ああ、じゃあ——兄貴たちも？」

「二人とも」

何故そこを確認するのかと弟は訊かなかった。

「……ステーション行ってるわ。一旦帰るよりそっちのが早いし」
「うん」

下の兄も外出中で、ステーションで合流することになっていると

いう。待ち合わせ場所を聞いて通話を切り、ついでに何気なく時間を見ようとディスプレイに目を落とした。もう一本着信があったことに、そうして気づく。——普通のコールなら、今の今まで気づかないはずがないわけで。

安全な場所にモバイルを置いた。ボールを宙に投げ上げて、渾身の力でラケットを振り下ろす。ダン！と床を鳴らして、ボールは俺の倍の高さまで跳ね上がった。

リダイヤル。切断。リダイヤル。切断。

名前を登録していないせいで、却って見慣れてしまった数字の並び。着信記録の弟の名前の次に、拒否設定のマークつきで載っていた、九番フォルダの一番下の番号。見舞いだろうか。あるいは、詫び。それとも。

新年なら挨拶だろうと思う、進学の時期なら祝いだろうと思う。

自分の後で向こうから来れば返礼だろうと思う。ここで一度だけ返したのでは、同じように解釈される可能性がある。

だから何度も繰り返し返した。着信記録を幾つも残した。怒鳴る代わりだ。罵る代わりだ。声と言葉でぶつける代わりだ。

なんでそこで話を切り上げたんだ。なんでその道から帰したんだ。なんで三人もいた中で、明日香だけが跳ねられる位置にいたんだ。なんで——明日香以外じゃなかったんだ。

訪ねていったのは明日香だ。明日香の方から行ったんだ。あいつらが誘い出したわけじゃない、それはわかってる。わかっているけれど。

その時間、俺はクラブに出ていた。弟は家にいた。兄たちは三時間以上も離れた町にいた。父と母は仕事先にいた。防げたとすればおまえたんじゃないか。なんでみすみす事故に遭わせたんだ。何をしてたんだ。その場にいたくせに！

リダイヤル。リダイヤル。リダイヤル。狂ったように同じ操作を続けていると、

「何やってる」

「わあ！」

下の兄が正面に立つや否やモバイルを取り上げた。近づいてくるのに気がついていなかったから、反射的に大声を上げてしまっただけだ。

「うるさい。人前で」

「そっちが脅かしたんじゃないか！」

「戻ってきたのは正解だな。少しは落ち着け」

「お」

叫んだことだけを言ってるんじゃない。わかって、かつとした。

「落ち着いてられるかよ！」

「落ち着いてられるときは落ち着くまでもないだろう」

落ち着けないときにこそ落ち着く努力をしろ、と言われればそうかもしれないが。

「なんでそう冷静なんだよ、兄さんは！」

「どいつもこいつもそういう調子だからだろうが。俺のパニクる隙がどこにあるんだ」

叱る風でも呆れる風でもなだめる風でもなかった。

淡々とした声を聞くうちに鎮まってきたのは、口調も内容も至極兄らしかったためかもしれない。いつも通りだ、なんて言ったら兄が冷たいようだけれど――親まで、というか親こそ、動揺や不安を抑えられないこの状況では、それこそ落ち着く態度だった。

見るぞ、とそれから断って、発信記録を確かめたらしい。溜め息を吐く。

「着拒、解除しとけ。向こうがかけてきたら直接謝れ。これじゃただの嫌がらせだ」

「え……いや、だつてさ」

向こうがかけてきたとしたら、それは当然記録だけ残すつもりであるはずだ。出られても困るんじゃないだろうか。

「それは使い方を根本的に間違ってるんだ。通話だろう。出て何が

悪い」

……文句つけられたらそう返せばいいのか。

「わかったよ。かかってきたらな」

「取れたらでいい」

肩を竦めた意味を、一拍遅れて悟る。クラブもあるし病院も行くんだ、コールが来ても取れなかったらしょうがない。……は。逃げ道がちゃんとあった。

ちゃんと通じたと見て取ったのだろう、唇の端を軽く上げて、兄はモバイルを差し出した。応えるようににやっとして、ふと目が熱くなったのは、まだ少し興奮が残っているらしい。随分久しぶりに笑った気がする。

大丈夫。大丈夫だ。日常は兄さんが守ってくれる。兄さんが連れ戻してくれる。

「兄貴たちの前で泣き出すなよ?」

「わかってるよ」

照れ隠しにぱしんとモバイルを引っ手繰った。やれやれとばかりに兄は溜め息を吐く。いつもの調子で。

……泣くなって言うなら、煽るなよ。

（後書き）

「牙」と併せてお読みくださった場合、「矛盾じゃないの?」と思われる部分があるかと思いますが、その辺りは次回以降で明らかになる予定です。

連作の4本目となる「誰が為」を掲載しました。併せてお読みいただけると嬉しいです。（2011/7/24追記）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9311q/>

着信拒否

2011年8月21日03時16分発行